

可見圖益志

畫

特別

14

696

6





Handwritten Japanese text in cursive style, consisting of approximately five lines of characters.

こゝ

Handwritten signature in cursive style, ending with two red square seals.

凡例

- 一 皇紀の月と日と年と草と木と鳥と虫と人との事
- 一 せしむるの事
- 一 元禄の和漢の辞書と、川書と、
- 一 比古草稿の事

一 考訂 秋のついでにあひだけの歌と類聚  
 せしむる是ありてその罪ありてし  
 一 古歌 古の歌のついでにあひだけの歌と類聚  
 せしむる是ありてその罪ありてし  
 一 公の年 公の年とあひだけの歌と類聚  
 せしむる是ありてその罪ありてし  
 一 少の國 少の國の年とあひだけの歌と類聚  
 せしむる是ありてその罪ありてし



目録

- ① 二重のせんむる
- ② らせんせいの着板
- ③ さんせいの
- ④ 十六の
- ⑤ ありての
- ⑥ 菊の
- ⑦ 通の
- ⑧ 伽羅の油
- ⑨ 燈籠の
- ⑩ さの

- ① ぼく君
- ② 草花の流り
- ③ 田楽
- ④ せんごん舞
- ⑤ 猫とこゝろ
- ⑥ たんご
- ⑦ ろくご
- ⑧ 兜の舞
- ⑨ 三弦

可見圖並志卷之三

① 二枚せんごん

今度... 高小三夜黄舞... 元我國...  
仕事... やま... 以東部...  
醉歌 梅ヶ枝せんごん

水谷隨筆

梅枝並舞家初ハ神明社の以野  
廣小治... の仕... の... 之傳...  
長... 之後... 世... 之... 後...  
... 當... 如...

此等書は皆その下に...のありし神祇...の...  
の...  
の...  
の...  
の...

**むのび紙**

寛永

ふれ...の...  
...  
...

...の...  
...  
...

二 **なま** 押入の着板

押入の用紙

...の着板の古圖

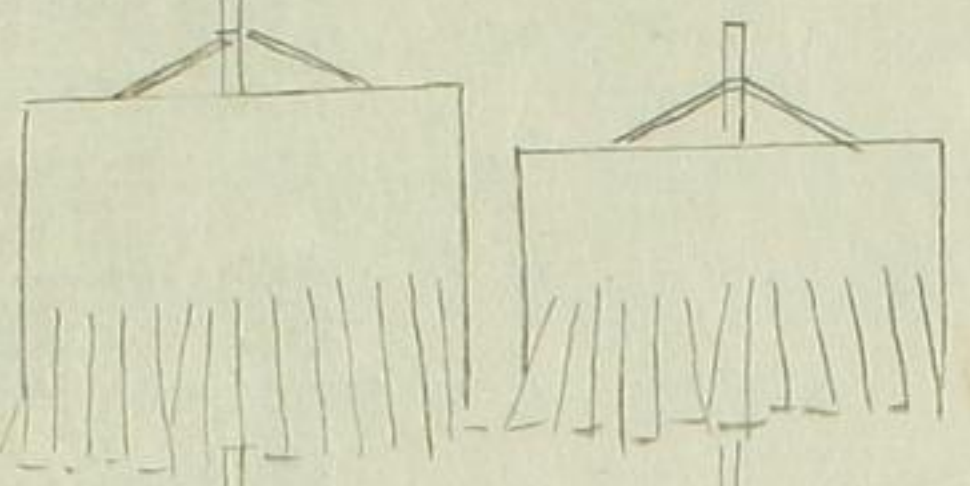
...の...  
...  
...

**武用辨畧**

指物 部

赤出

赤垂



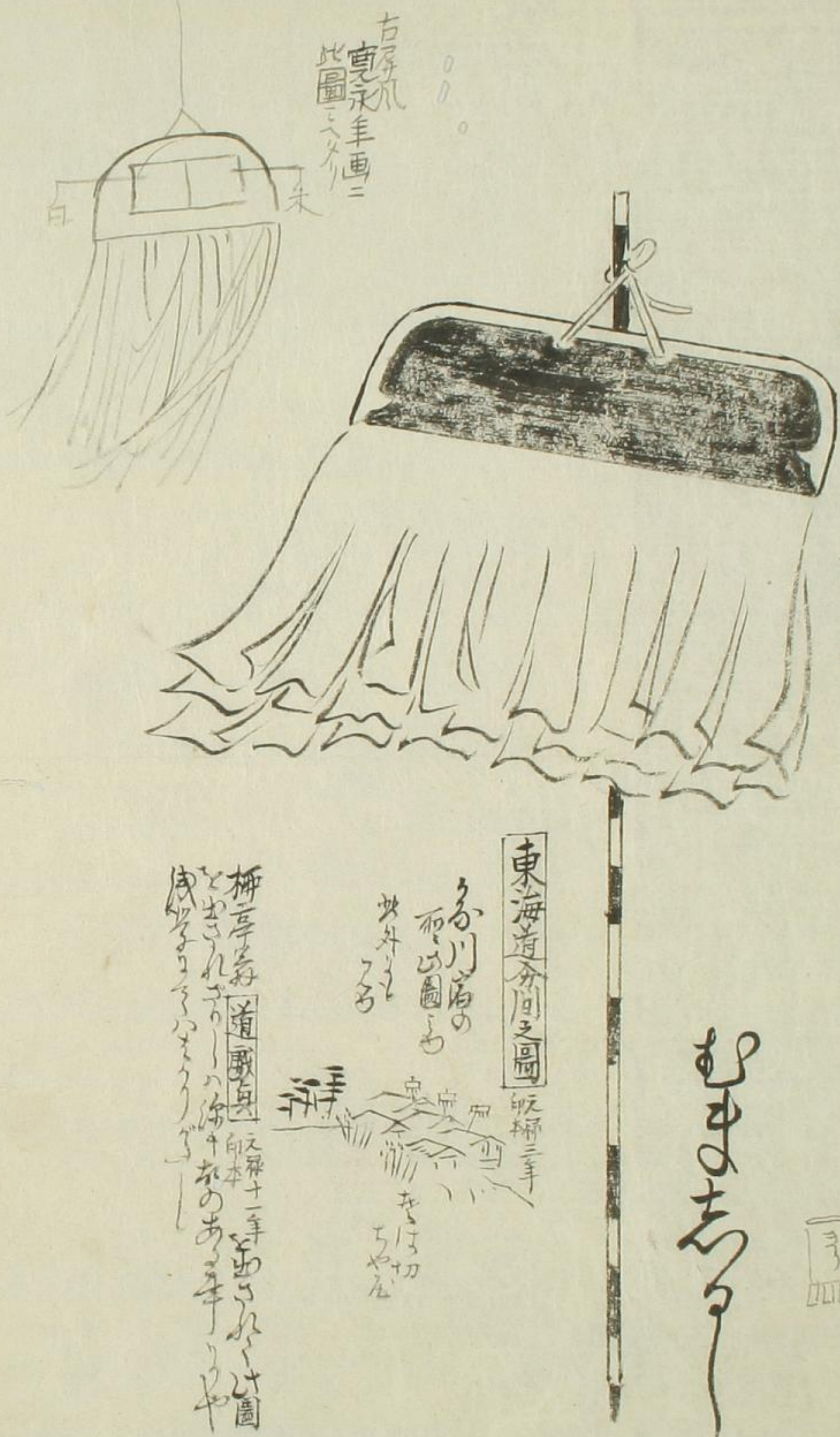
赤出赤垂相似又ルチ  
以テ昂加割ト稱呼共  
各別物ナリ

加...の...  
用...の...  
...の...  
...の...  
...の...  
...の...  
...の...  
...の...  
...の...  
...の...

御馬印

序明曆一載五版穀且

永井日向守 廿一



人倫列傳圖卷之...

東海道分回之圖



東海道分回之圖 永井日向守...

古馬印 實永手画 此圖...

三さんさめ

松の葉

元禄十三年末年 さんさめ

山は月よりのまほしきものなり... 松の葉...

能翁翁袴集

元禄十三年 敢て附

牙城のあはれ... 長あゆみ大いそ... 酒がけはあきく...

その歌のおかしき...

新永代藏

正徳三年...

江もよもよも... 袖もよもよも...

元禄十三年... 松の葉...

元禄十二年春、大坂茶屋、  
 多き、上の方、小坂、  
 大坂茶屋、  
 加賀、  
 甚の、

四十六

世話盡

明暦三年

娘、  
 今、

日本、  
 用車、

續山の井

寛文五年

花、  
 十八、  
 十八、  
 十八、  
 十八、

河丹國の部

小角豆

廿五、  
 後、

か、

雅莖餅

五、

金子、  
 十八、

三、  
 三、

い、



系はる如き事... 石川... 東山... 南天... 珠... 海... 井川...

談海

寛文十二年百人一種

井川...

大倉...

那波...

弓...

早...

松...

日...

は...

六部問抄の諸説

世新重宝記

小...

大...

大...

物類稱呼

...

...

呼...

一目子斬... 潘士...

ついで  
大正  
小  
白  
...

縁起とせきことこのろ未社三年次所帯がチヤハ  
ヨんカ 神ふりくく呼ぶし下

しりけ

神祇書

又白

又白くその中...

吉原大鑑

た必おとりの居の上方々々たより是公太閤秀吉の  
代々曾呂利新屋の... 男形判  
そは太閤... 是お右の左  
ありて

前權東新  
在川原  
堀の住新  
右岸

北女問紀原

享保五子八月  
右問答記圖

吉原の客人は預の二座の伽...  
鎮城置かすもの...  
身の中...  
左殿の右人...  
おたし...  
舟子不...  
い...  
男...  
改...  
先...  
...

或言  
龍世正伯は  
子と立大鼓  
の妙と得  
似我流と云

神ホカの力を増して何事も成さぬが  
とゆふもあふれぬとて人々  
従ひて其の又成る百  
このことを観たるはさかたにわづらひ

草茅危言 中井積善撰

常間ハ二居士小説ノ書ニ多クミユ音樓遊治ノ  
席ニ出テ巧言側媚ノ態威儀譁雑躑ノ事ヲ  
以テ身ヲ賣一ニ座ヲ持テ渡世トスルヨリ俗ニ若舟  
テ太鼓持ト云六齋念佛ト云ハヤニ物ヨリ起ル  
是ハ念佛ニ席ヲ付鉦ト太鼓ノ二ツニハヤニ  
其役ハリ是ニ右テ鉦ヲ持物ハ太鼓ヲ持ズ  
太鼓ヲ持物ハ鉦ヲ持ヌスト云威言ヨリ出スル

右目ナレヨコ下  
あつとく書と信が書好すいといハ實母  
全言好むしりれの書はこゝろあつとくか  
しつとる尚お丹の書は何とてえんあ  
何と説あるのさる

七通夫のさる  
洛陽大佛三拾三間堂ありて通る夫の起る我  
尾張の人を討給へ目原の **和時始** 三  
州の書は朝園年を居 伴島の人 上守と云ふ

しき高ききききききききき

大夫敷張

のりあつた

洛陽大佛三拾三州堂射初一第ハ同東山  
今熊野觀音堂別當ありこの坊と也  
或實より好くハ政の音塚を射のべと也  
とて其坊と云ふ三拾三州堂は休とて  
とてまうとて射也あしとて年たると也  
此外もおぼゆるはいつか可方也  
一とていふ一たんと也いふはかき  
とていふつとて人などいふはかき  
をまうとて射也はつとて人などいふはかき

ら勝の外は勝るやとて也いふはかき  
但き人などいふはかきとて人などいふはかき  
松平の屋敷に川原  
松平の屋敷に川原  
松平の屋敷に川原  
松平の屋敷に川原

慶安四年

八月廿日

作御矢細渡福井松平長重  
作矢細上福井松平長重  
福井河内様

慶長拾三年二月九日  
通矢松平

射 松平の屋敷に川原  
射 松平の屋敷に川原  
松平の屋敷に川原

万武松平

射 日 川原  
射 日 川原  
上田角屋

衣之如くくく古傳本

總括分限張

しつふ

御りく泉

三百五拾石

川原権村

御りく泉

四百石

新園平之丞

花巻名馬圖會 其鬮卷并草之矢殺之等七十年後因  
平之丞とてし之降集三十三名堂におわく其ら皆と試之初  
しより相違ひくされともあつても

八 伽羅の油

中古風俗志

明和元  
甲申

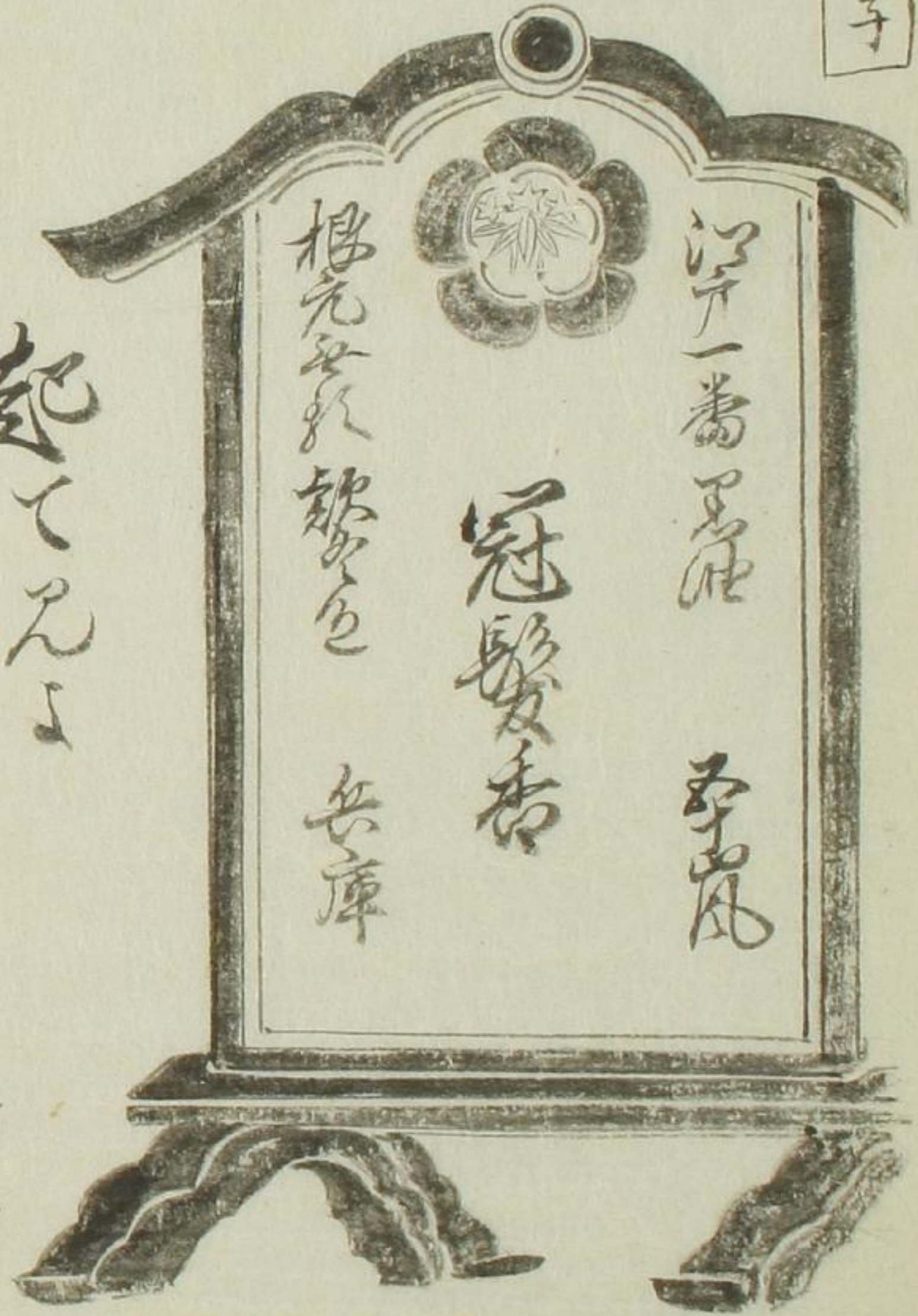
及の古風物語

音之物語

昔夫を替りたる伽羅油引たる膏大の物たる

物 桐草の膏 昔伽羅の油を河原権村元一在  
付たる人々有由付る今髪直の之下り又八月合す事  
毛の如き人の髪を髪膏を晒し髪を乾し髪色  
を潤色の如く或は身髪を膏買今又美息を  
吹つけ水髪は結る髪へ髪直へ平付たる膏を  
一向は水油斗り結る由美男くくくく  
遙遠の由平すくくく 伽羅の油は美澤所  
其十先くくく 芝神棚前より大好庵元の花  
湯湯を井のくくく 湯をくくく 湯所より斗り  
湯所よりくくく 湯所よりくくく 湯所より  
後より湯をくくく 湯所より

江戸名物三度子



江戸一番名産 冠髪香

梅元紅紙製 兵庫

起てんよ

そげもつらぬ

世乃香

五月堂

海報

江戸名物三度子 天和三年

世乃香の由来の由り

新嘉坡の島に江戸の由り  
 江戸の由り... (transcription of the main text on the left page)

佳丁改

魚貫

江戸

津や

山吹

手乃香

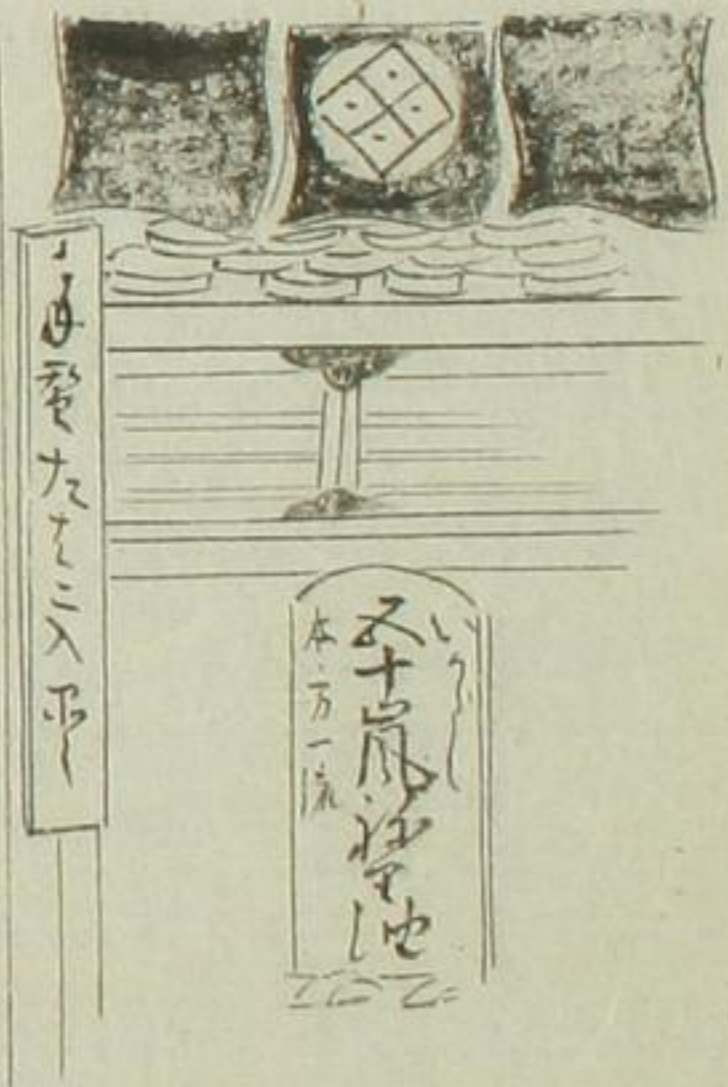
江戸の香や



西霍俗つれく

元禄八年

此圖えり



毛吹草

寛文十五年

小車もこせり油と花の巻

信全

玉海集

貞享三年卯午

葛のくハ伽羅の油と花の巻

良俊

貝二復

寛文十二年

よりのまのハ伽羅の油と花の巻

三木

江戸圖鑑編目

元禄三年

伽羅産

神田銘所

山城

今田川所

林 法喜

神田門所

川 法喜

續江戸砂子

寛文廿二年

三ヶ所

西國橋西銘

寺 虎兵衛

芝神所

大好庵

花の巻

林 法喜

道敷真

元禄十一年小此圖えり



左の圖ハ人物草畫

僧古洞筆

名家畧傳曰僧古洞名ハ明卷證蓮社ト号スヤ  
 虚舟トモシメリ和州郡山布西ノ嚴守ノ  
 一ノ家ノ風ト云セリ行ノ筆ヲ記セリ  
 この一ノ家ノ風ト云セリ行ノ筆ヲ記セリ

此圖ハ古洞ノ大道ノ賣高ノ圖ナリ

府下ノ一ニ云存アリハ賣高ノ名アリ  
 立修所和州ノ順正ト云々全書者夜ト云  
 有本付ノ久昔ノ父ノ父ノ父ト云々  
 外傳ハ七十五年前ノ和州ノ賣高ノ名アリ  
 一ノ家ノ風ト云セリ行ノ筆ヲ記セリ  
 此圖ハ古洞ノ大道ノ賣高ノ圖ナリ  
 府下ノ一ニ云存アリハ賣高ノ名アリ  
 立修所和州ノ順正ト云々全書者夜ト云  
 有本付ノ久昔ノ父ノ父ノ父ト云々  
 外傳ハ七十五年前ノ和州ノ賣高ノ名アリ  
 一ノ家ノ風ト云セリ行ノ筆ヲ記セリ  
 此圖ハ古洞ノ大道ノ賣高ノ圖ナリ

販賣付店  
 キヤラン  
 アブラ





いとかいとか

此圖ニ入タリ

役者幸徳棚 元文三様 正月印本

見立江戸名物

上書 坂田定四郎

上下ついでついでいひ出し

上書 玉屋 江戸名物

ついでついでいひ出し

江戸圖鑑細目 元禄三手

伽羅屋

神田河原

宇田川町

神田河原

山崎 林道 口手

九燈の影絵



當世かとい 雛形

明和安永の

山崎の影絵

大正流行

ついでついで

ついでついで

ついでついで

続伊智多助分門 江戸

江戸の山崎の影絵  
ついでついで  
ついでついで  
ついでついで  
ついでついで

安永八年(天明)印本  
江戸東安部玉腹子著

山崎の影絵

ついでついで

源八

ついで

ついで

ついで



太平樂府

明和五年

婢女行

前前唇不好鳴笑止  
減多偃伏金逐相  
八寸長箸脚覺甲

此圖の如く整髪

髪を束ねては  
頭をさす



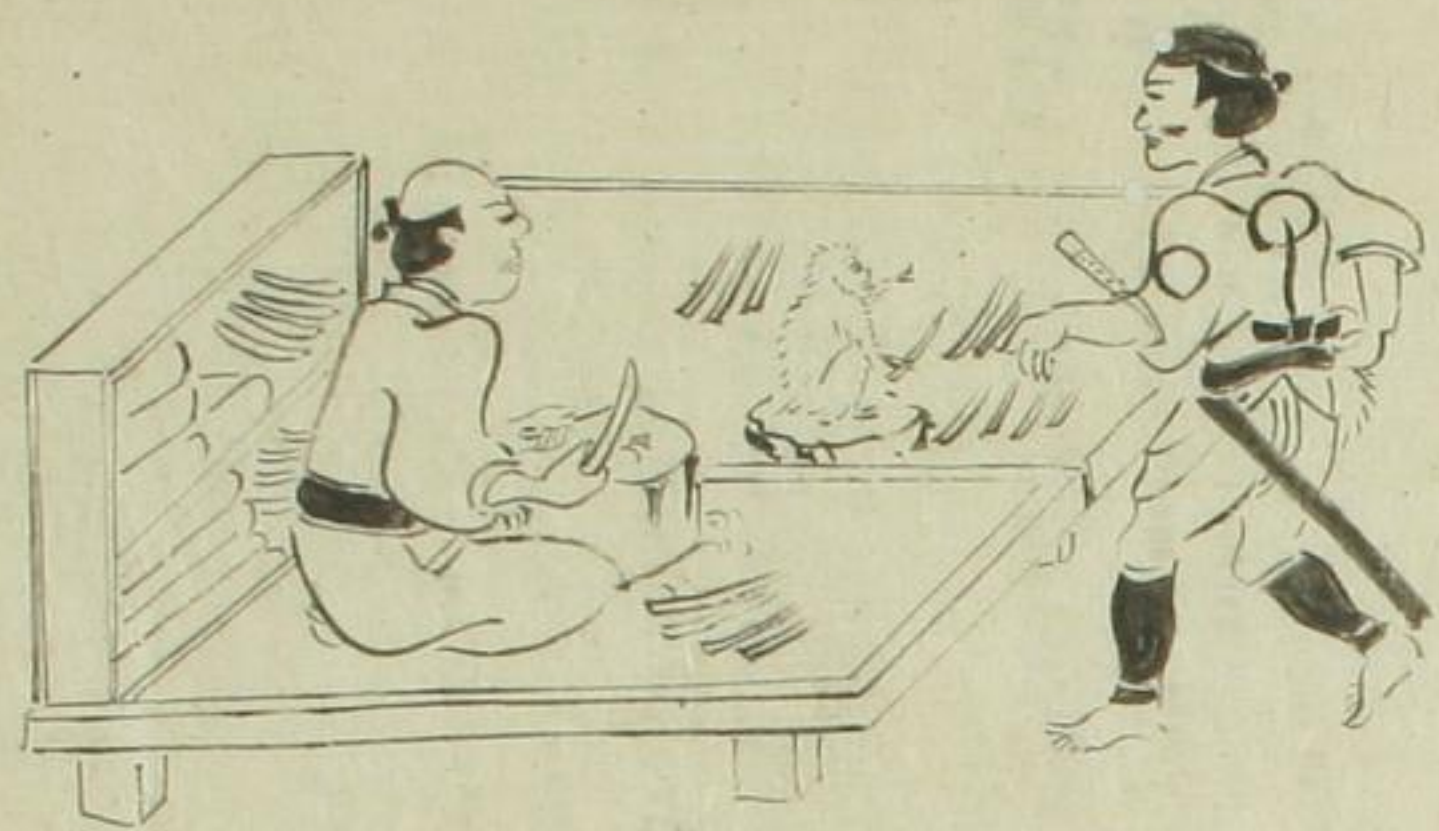
真道道行國大夫  
無正張出燈籠鬘鬘  
真鉋耳搔今不新

振衣の物語

明和八年

髪の内は式も洋洋女の  
十六は髪をさしひんぎ  
或はかたはさしひんぎ  
此の中は髪をさしひんぎ  
何れも髪をさしひんぎ  
髪をさしひんぎ

京より



四角くつゝの地

十

楊枝

道敷真

文政十一年

此圖



川の舟の方より旅屋の楊枝を  
舟舟の玉製の  
十の

太平樂府

明和五年

婢女行

前髪  
口脂不好 鳴笑止  
減多 偃伏 金逐相  
八寸長 簪 脚 釧 甲

艶語秘訣

此圖の如く整髪  
髪をさかすは  
頭をさす



鼻唄道行國大夫  
無正張出燈籠鬘鬘  
真鉋耳搔今不新

振衣名物語

明和八年

髪の内は式も  
浴衣の  
十六日  
或は  
此  
何  
ア  
ク

十子

東海道右所記

栗田  
揚枝  
早の  
尾の  
道敷真

毛吹草

宣和二年

道敷真

元禄十一年

此圖

諸國  
山城  
河内  
玉串楊枝



人物草書

古阿  
之筆



楊枝造

ヤウシケツリ

江戸名物唐子

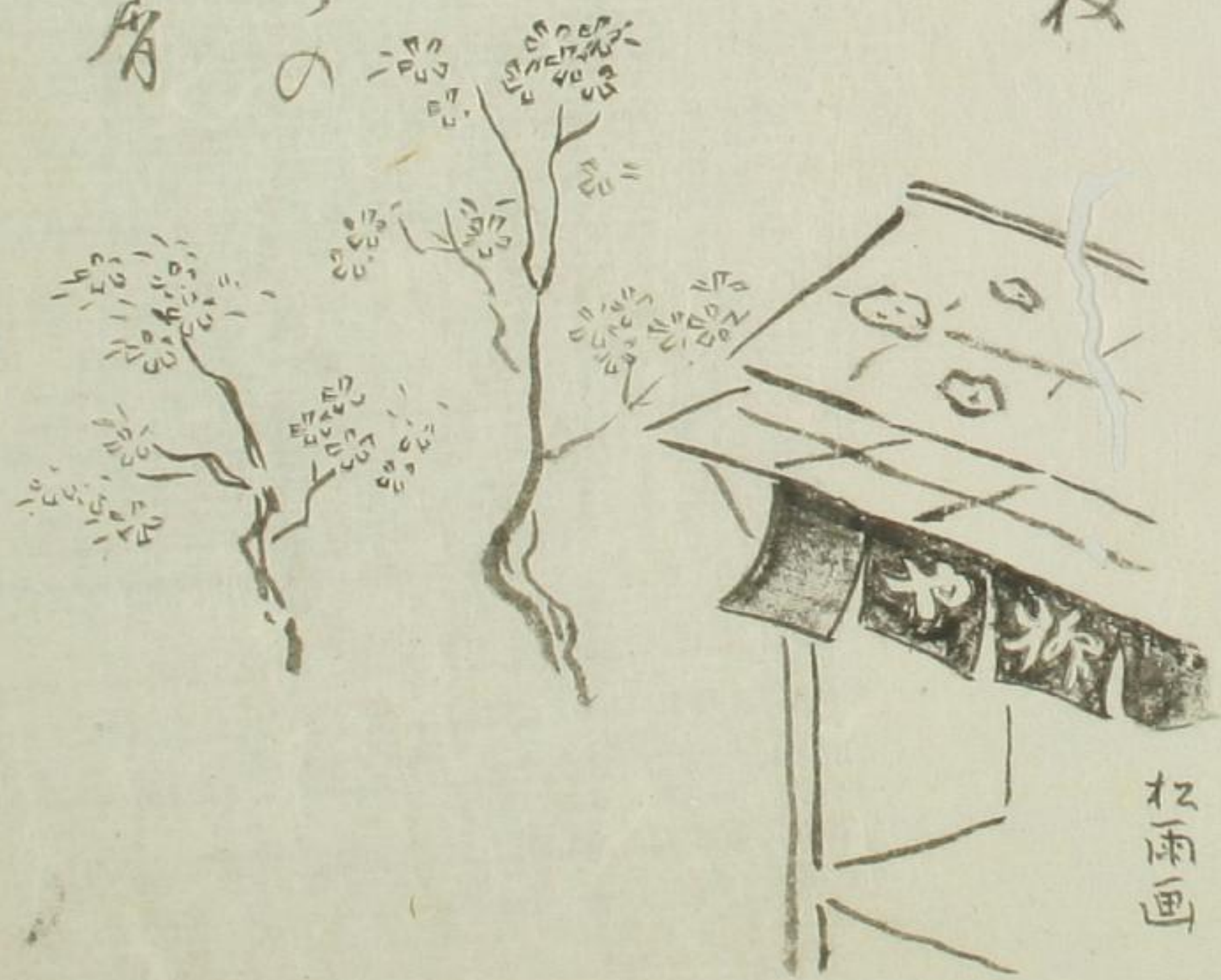
かく江戸名物の  
唐子とは何ぞや  
唐子は江戸の  
名物にして  
江戸の人々  
は唐子を好む  
唐子は江戸  
の味である  
唐子は江戸  
の文化である  
唐子は江戸  
の歴史である  
唐子は江戸  
の魂である

猪屋の揚枝

入おや

千本町の

揚枝屋



松雨画

十景

詠諧雜巾

延宝九年甲申

楊枝の枝山への草とてなせり

可因

二十余年の漢草草世も切れぬ末や 扇の儀は



ついで



人俗判り

俄雨

延宝元甲申

ふもやとてふもやのどろろり

三列吉田

雨丸

① びーる

諸國雅吟集

延宝十二

志んん木の実をかぶる草葉

高木

皆醉

いっしよるあまのこや

とらん山嶽の扇子の名

おん紙のたつあのを

不合集

延宝十甲申

ちんみ

必雲

水の水を

湖春

おのの油

尚光

古写本

延宝七年



此  
名

七十一番藏人老親合

土佐利部大輔光信公年

か  
ん  
ま  
り

ともぬいぬい<sup>すけ</sup>の神をいし 政茂  
 とのぬいぬいの厨子のさむいさ 湖春  
 又しとくけいさくさくさくさく 元重  
 厨子のいへは過ぎまじき書<sup>り</sup> 二羽重<sup>い</sup>  
 後者の過ぎま川傍の過ぎまかか<sup>り</sup>の過ぎま<sup>り</sup>  
 つしをさくし今りぬいぬい<sup>り</sup>をさく<sup>り</sup>  
 とりやう<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>

續<sup>り</sup>山の井 貞文七年  
 大坂 一安  
 櫓の厨子やがやう<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

假名世説

青山和為の物語は希聖先生つゆの訪生文集にて  
加つて狂辨を伴ふものか感せしむるに  
狂辨の事しりしは先生徴知の二十四文明月夜と  
語れりし事なり

草塚連

上立安中五年下立安中五年の改新に花と  
かきし草塚連の物語は海時所より多し  
公義神時とてをいふは是は海時盛衰の公義  
方圓を説くは此草塚連の物語なり  
は時句を歌ふとて此の物語をいふは  
しりし事なり

草の物語は草塚連の物語なり  
草の物語は草塚連の物語なり  
草の物語は草塚連の物語なり

同本

三草花の流行

馬琴先生の玄同放言と元禄の椿  
百椿譜  
宝享の

牡丹 軒録の道政の椿  
橋品論  
此西三年 文化

草花の流行 草花の品 朝白の國  
下加へてゆれり

良山集 冊唐二年の序

世に椿と云ふは

椿と云ふは春の八丈の初うけ  
長鬘

又花の川 唐安元年 端年の序

一年椿の花とて云ふは  
僧侶其乃  
是れは春の八丈の初うけ  
長鬘

正徳の如く大和と  
しる物と云ふは  
切らば花の  
此草花の  
とて云ふは  
草花の  
草花の  
草花の





身より及んば... 徳徳物徳徳と稱す... 心... 身... 父母の恩... 聖三... 長門の國... 彼... 格... 花の...  
身より及んば... 徳徳物徳徳と稱す... 心... 身... 父母の恩... 聖三... 長門の國... 彼... 格... 花の...

百... 盛... 男... 女... 正... 又...  
百... 盛... 男... 女... 正... 又...

電... 本岡坊...  
電... 本岡坊...

中... 武...  
中... 武...

長... 紅... 乃...  
長... 紅... 乃...

任... 何...  
任... 何...

百紅集 出来あり

塩尻 正徳半菊ちりり花の由り也

或書より宣政九己年春の比中合し

格別より利り元集の歌のよき出り

そよよと

花のよきしりり万りり花のよきしりり

又そのよきしりり花のよきしりり

今又姫百合

天保の石解長生草

今又姫百合

海月の草

石解長生草

長生草

金吾

金吾

金吾

金吾

金吾

金吾

金吾

金吾

金吾

金吾

金吾

金吾

金吾

曲々者矣豆腐の字のつゝたる形を以て  
 田樂の若者侍の歌 加賀能登越中  
 田樂といふなりたるは...

田樂法師高足曲

任士口名勝圖會  
 田樂トハ田ヲ植ル時  
 種々ノ柏子ヲ糶  
 歌トウケヒ曲ヲマ  
 植女ノ旁ヲ助ル  
 ヲリ起リて田ヲ  
 名有且源道節  
 氏間ヨリハシラレ  
 中ハ田ヲ種モ吾一  
 家ヲマニサセ公ヲ  
 御前ニサセシラ  
 キのヲハムレと云

加賀能登越中  
 豆腐田樂の圖



和神始  
 延元元年長元年中... 田樂と云もの  
 延元元年長元年中... 田樂と云もの  
 ... 常陸國久慈郡今時山...  
 ... 一安... 大...  
 ... 八百廿大...  
 ... 相傳くこれあり常陸國志

閑田耕筆

もも田樂法師の徳を  
 ... 豆腐の字のつゝたる形を以て  
 ... 田樂の若者侍の歌  
 ... 加賀能登越中  
 ... 田樂といふなりたるは...

江戸八百韻

延元六年卯本  
 ... 豆腐の字のつゝたる形を以て  
 ... 田樂の若者侍の歌  
 ... 加賀能登越中  
 ... 田樂といふなりたるは...

物なき 唐の安んずる

談海 唐の安んずるの記をりし

すりお海を仕取あふあ

らんじんさの

一頁書

美しかりききあひ存るもの人々をむるは

盃せんばん餅

唐の國より善哉餅といふを東都より

あるは餅とのいふは物なき中昔の

とありし

崑山集 明徳三由年卯午

くはるるや新もせん

あふるるや心志の子の

是ハ由の天社を十月製を神誌の

神在餅又神奈餅といふ由物類稱呼及

はるるるるるる善哉餅といふるるるる

是も古くはるるるる善哉餅といふるるるる

反碗といふる唐のよむるる 政定

も物のは善哉餅といふるるる 春澄

世話文章

餅

織細餅

飯團餅

物類稿 上総 上総三子ハミザイ録ト云々  
或人長門の國より花の記と云々

⑤ 猫とこねこ

猫とこねこいふは昔よりいふ

阿波手集

宣文 在幸石

近行の如き事と云ふは二子

前鑑別志

み福の如き事と云ふは二子

或書の高麗國渡りし由高麗と云ふ

萬葉全書  
猫純黃純  
白純黒者  
佳

是の如き事 若菜巻 猫の如き事と云ふは二子

因三塩尻神社ニ大高麗國大書ニ自記あり梅と云ふ高麗樂

⑥ たつと

たつと云ふは昔よりいふ

醒睡笑

元和五年撰 小抄したる事

人あつと云ふは昔よりいふ

明三  
神理  
たつと  
醒睡笑

所獲よの白をくひぬる茶とてつづばある  
ともみ茶の杵のあはれにひびくあるんと思ふ  
ありといひてを聲おぼれあもやの白み茶入  
ゆふはとそはあつそ思ふあはせめん也

**世話盡**

一丁の世話盡  
兼應三年撰

曳言く話く件み

そよけいなるも たふぶの茶もよ

慈喜周

おもむきしきもつてしり

**伊勢那諸間書集**

蓬葉の傷をおひたれくう

揚貴妃と獨りある下

たふけいしやするえん

**且の降餘情男**

元禄十五  
卯本

祐宗

**大墮馬駈り**

**詠諧山書集**

たふだはれはよしもつらぬ 林月

**○七**

**中古風俗志**

小百二四年年斗の書 宣應元年 兼

痛くはれはれはるものおもむくらしき名をうめ

隆達 一丁の隆達 龍合 一丁の龍合 龍合 一丁の龍合 龍合 一丁の龍合

おみみ 一丁のおみみ 龍合 一丁の龍合 龍合 一丁の龍合 龍合 一丁の龍合

をあらはるのみうし 一丁のをあらはるのみうし 龍合 一丁の龍合 龍合 一丁の龍合 龍合 一丁の龍合

是志のしき 其のしきの書

小倉何んか  
 ありしころ  
 楊語  
 俗調  
 昔の  
 良山集  
 花の  
 舟の

鶴つららの月やら  
 母の  
 春心

爲世小歌端

一夏文延宣の以印中かへし  
 一桂堂藏本

山の  
 小の  
 松の  
 夏の  
 ありしころ

衣の半 山のさきつらなる流りせしむ

新撰時節

天和二年 時節 序

二氣分あちえり

吾者凡そ目を海のさきあちえり  
さきあちえり 聲のさきあちえり  
さきあちえり 聲のさきあちえり  
さきあちえり 聲のさきあちえり  
さきあちえり 聲のさきあちえり  
さきあちえり 聲のさきあちえり  
さきあちえり 聲のさきあちえり  
さきあちえり 聲のさきあちえり  
さきあちえり 聲のさきあちえり  
さきあちえり 聲のさきあちえり

犬子集

意せしむる流り  
御子洗河で流りらるる 重頼

六呪の舟

近頃川原竹蘆並削乙の矢字を張ハ二夜  
入るる云々

詠諸七百五十韻

陰暦の後の小春の御時 正長



庚午夏 疫二病を御了 如泉  
竹刺竹殿の川蜀魂音信を 信徳  
虫又喰と柱三輪のささし 春隆

庚午の年の八寶東七手あべし

百物語詠評

山國之傳 白雲高堂 四手 小近比之家

送竹刺竹殿のつとまのハ群談採餘 僧之詠  
出た故事あつて

又擗拾擗指の文子と帯とるの擗指の

リハ二布額輒範ハ一説ハ藤路の一花刺

毎のちのちの牌とある牌拾り拾擗指

の何れも何と云ふとあるハ一年筑前福岡の

射りし 雀と捕其つとまのハ小殿の勅

は四子と云ふハ傳相あるハ致外 雀と

是長吉の行あり又説ハ雀と帯ハ雀

の雀あり 雀と帯ハ雀と帯ハ雀

或書

擗拾擗指

將軍家流少御小姓親見愛助多仁天明二當年田

安御以外年ハ別ハ落馬河ハ何れも右

ハ年ハ上原何れも右擗指ハ

守りし存ありハ存持ハ親吉ハ右文字ハ

懐中ハ別ハ河賢ハ右何れも求と



一首の和歌とてたて入るれし

北北の國の事 北の國の事 北の國の事

情情のこころ 情のこころ 情のこころ

昨昨日の事 昨日の事 昨日の事

丘丘の事 丘の事 丘の事

園園の事 園の事 園の事

此歌... 文子心ありて... 〰〰〰

事言籍 簞藪し  
此節出... 五僧林... 部... 今茲辛巳... 春以彼故事... 即為我國之事... 書... 一符... 以粘... 々々... 北... 昨... 丘... 園... 符... 章... 方士之術... 而見... 異邦... 道書... 我國... 陰陽... 家... 亦傳... 之者... 所... 有... 之... 世... 人... 不... 知... 其... 本... 因... 除... 疫... 之... 名... 則... 用... 符... 章... 妄... 信... 之... 噫... 俗... 之... 不... 可... 曉... 者... 如... 此... 乎

風俗... 〰〰〰 福の度々

丸三線

糸竹初心集 續校四十年

昨日... 〰〰〰

文祿... 〰〰〰

琵琶... 〰〰〰

流... 〰〰〰

系... 〰〰〰

馬... 〰〰〰

石... 〰〰〰

〰〰〰





盲目は是の如く是を云ふ所の事なりけり  
川の事ありてある由き事なりと云ふ事  
またいふ事ありて因元子三度病の事ありて  
想ふ事ありてある事ありて世に事ありて  
盲の事ありて盲目の事ありて事ありて  
ことありてある事ありて人ありて事ありて  
その事ありてある事ありて事ありて事ありて  
おのづからある事ありて事ありて事ありて  
修

松の巻

元禄十年午申

人皇百七代正親平院の御子承徳の  
琉球より此後二位の事ありて事ありて和泉國  
境よりある事ありて事ありて事ありて  
長谷の親の事ありて事ありて事ありて  
三志の事ありて事ありて事ありて事ありて  
ある事ありて事ありて事ありて事ありて  
ことありて事ありて事ありて事ありて  
事ありて事ありて事ありて事ありて  
東澤江住ありて事ありて事ありて事ありて  
城ありて事ありて事ありて事ありて

南留別志

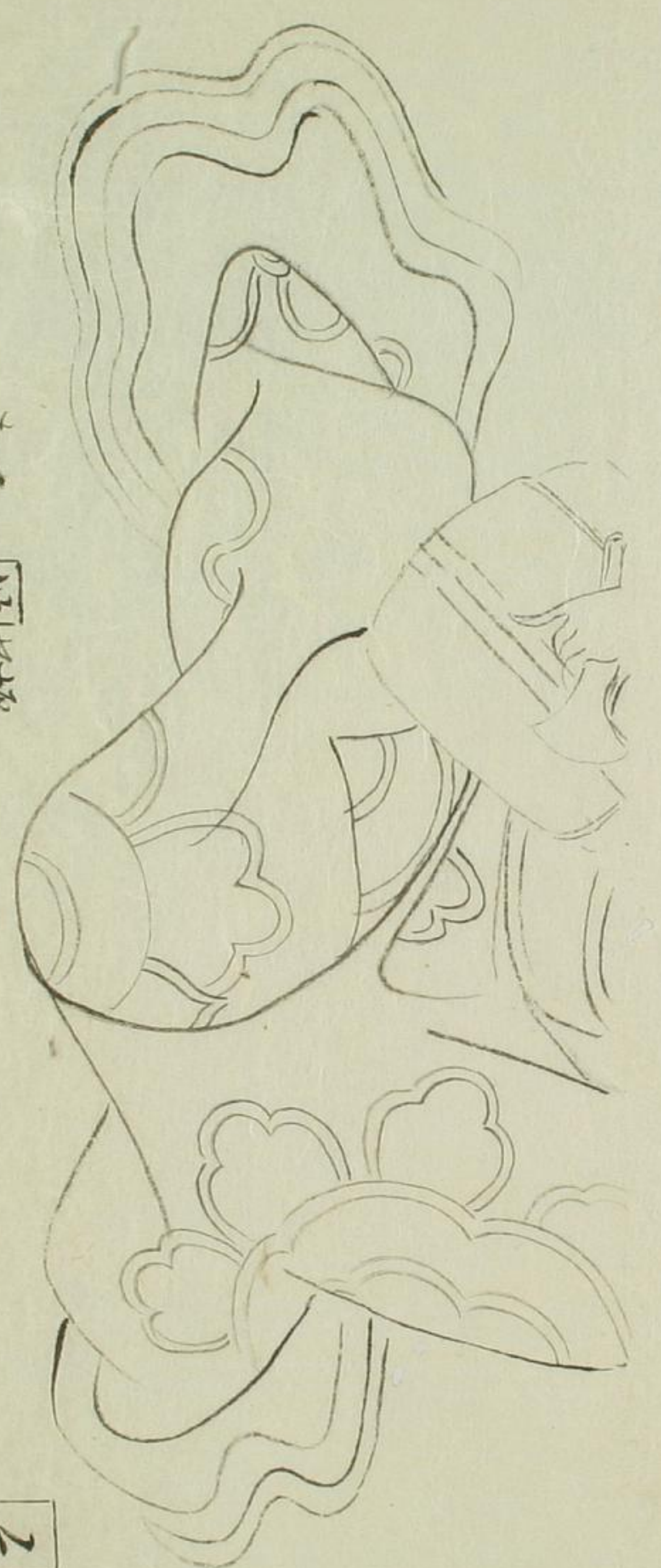
三線と云ふ事ありて事ありて事ありて  
見たりと云ふ事ありて事ありて事ありて



乙女之相姿

屏風之古圖 五意藏

時代之風流  
 寛永正徳の頃の  
 今より二百年前



醒睡笑 天和九年推弓

紗織線 皇女

毛吹草 皇女

三尾髷 皇女

似杖昨物語 文徳三年

三傷松 皇女

檢の形 皇女

娘の草 皇女

首の草 皇女

かしの草 皇女

武書は近松門左門 年々重し所持

蛇皮絲

一名 琉球絃

和名 三絲絲

胴鼈甲以蛇皮粘之

棹則以唐木造之

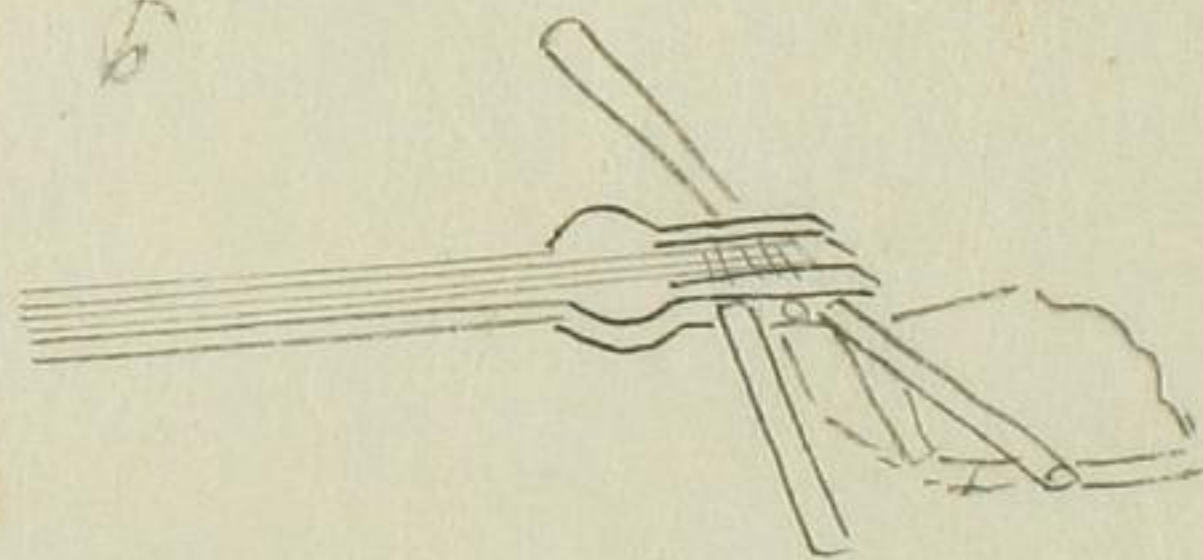
又三味線ハ本石蛇皮絲

又琉球絃ハ本石

則也凡多

人皇百七代正親皇院の御宇

承祿壬戌年の春琉球國ハ



昔朝和泉國坂の津小初  
後武將織田信長公乃  
指揮後即

禁闕前奏覽

帝久我大將通貞

勅書詔書

是と彈

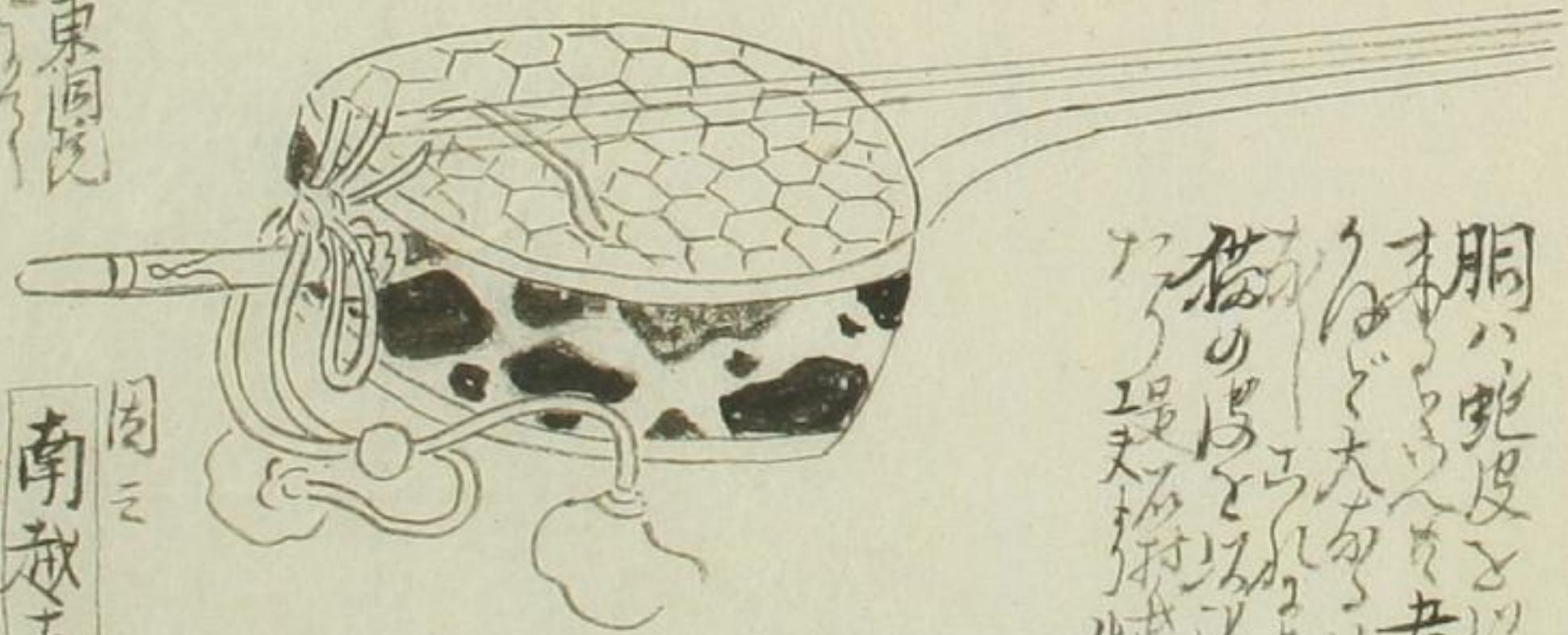
其鄂曲甚妙

也

則鼈甲用者

御琴琵琶之師少少也持了新作

石村也



胴ハ蛇皮と以て張  
るハ大分古朝  
のハと以て張  
るハ大分古朝  
のハと以て張  
るハ大分古朝

南越志云  
蜈蚣大者其皮  
可以製鼓

世事百談

三味線いりて雷州の景より琉球よりあつた歌の  
海地皮より張るるが世傳世傳之世傳也世傳といふより又録  
其間警方石村拾枝より才の年を承りてあつた  
口く琉球國の俗より其の拾枝の其曲とありて  
その詞も他と異なりてありて石村を承りてあつた  
後よりうちきりてあつたといふより又録  
石村拾枝琉球よりあつたといふ  
アヤリヤリヤリ。フリヤウ、ソシヒヤウニ、ニリヤ  
イヨアリヤヨイ。フリヤウウシ、リヒヤウフリ  
ヤウ

山の奥の三味線よりあつた石村拾枝よりあつた  
他よりあつた

ちよの始のてんふ然るは、十世後が  
あつたといふ

拾枝よりあつたといふと、其の曲も琉球  
その曲も琉球の時にあつたといふ  
二二二も上島よりあつたといふ  
あつたといふと、其の後柳川拾枝  
長きかたといふよりあつたといふ  
依止拾枝よりあつたといふ  
と、依止拾枝の端よりあつたといふ



多岐を三つに分ちて、此の川正の調子を初め、  
 深き水に舟をたぐり、頃正の調子を、  
 夫の後連川橋下一町の調子を、  
 本多の終に、端の終を、  
 糸大の終を、  
 好むを、  
 下那を、  
 するを、  
 孫を、  
 其の終を、  
 唄を、

一歌二

自原別撰ノ長吉也  
 中小路  
 此人正ハニテナリ

師匠  
 此人ヨリニテナリ

次往  
 此人ヨリニテナリ

石村権校

鹿澤権校

山野権校

石村年々系

柳川権校

初加夏那

浅利権校

伊豆権校

山崎権校

佐山権校

河村権校

備五心隨筆

寶曆七年庚辰久琉球中山王使東都來之節

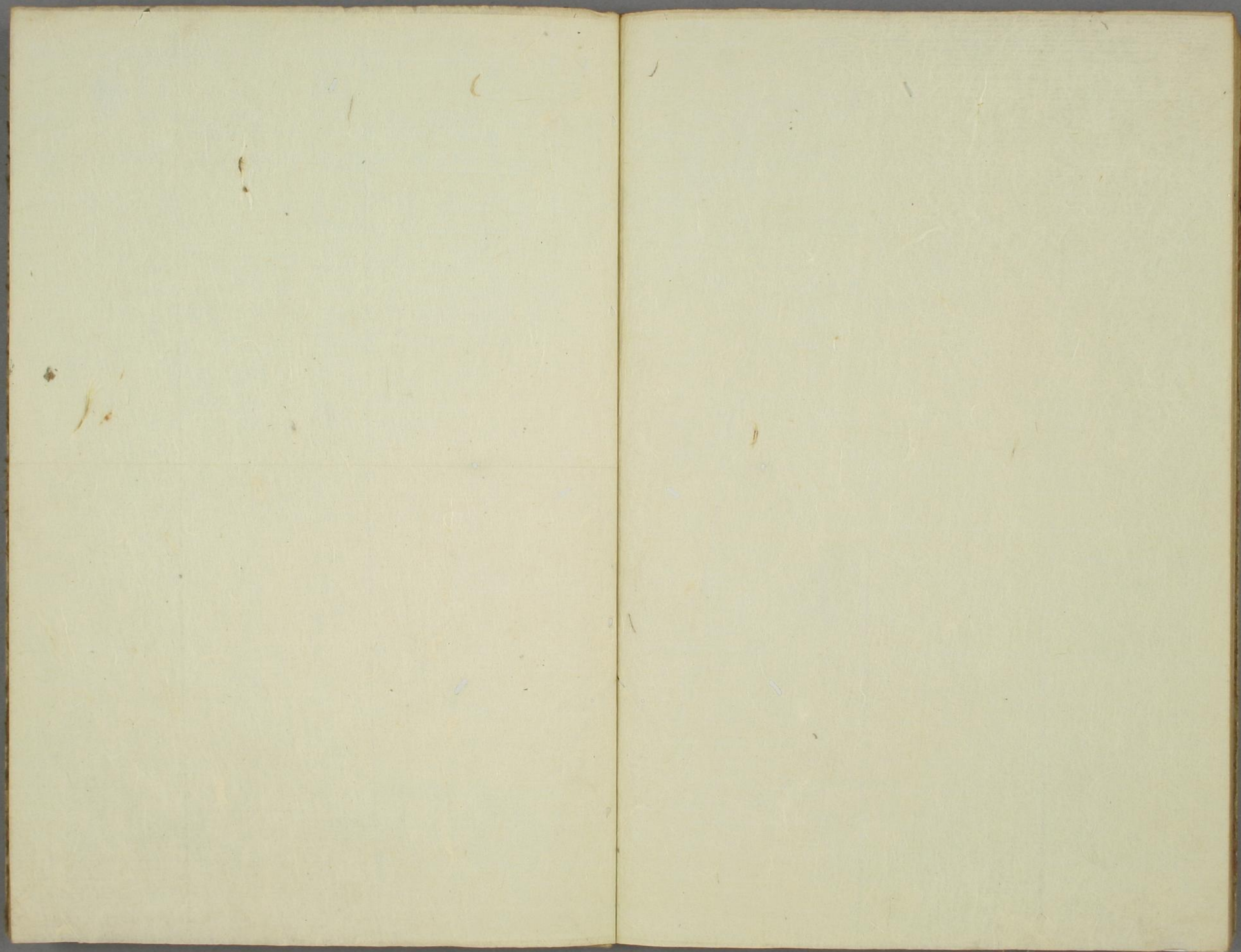
琉樂 射月廿日作  
 長生苑 樂 芷蘭香

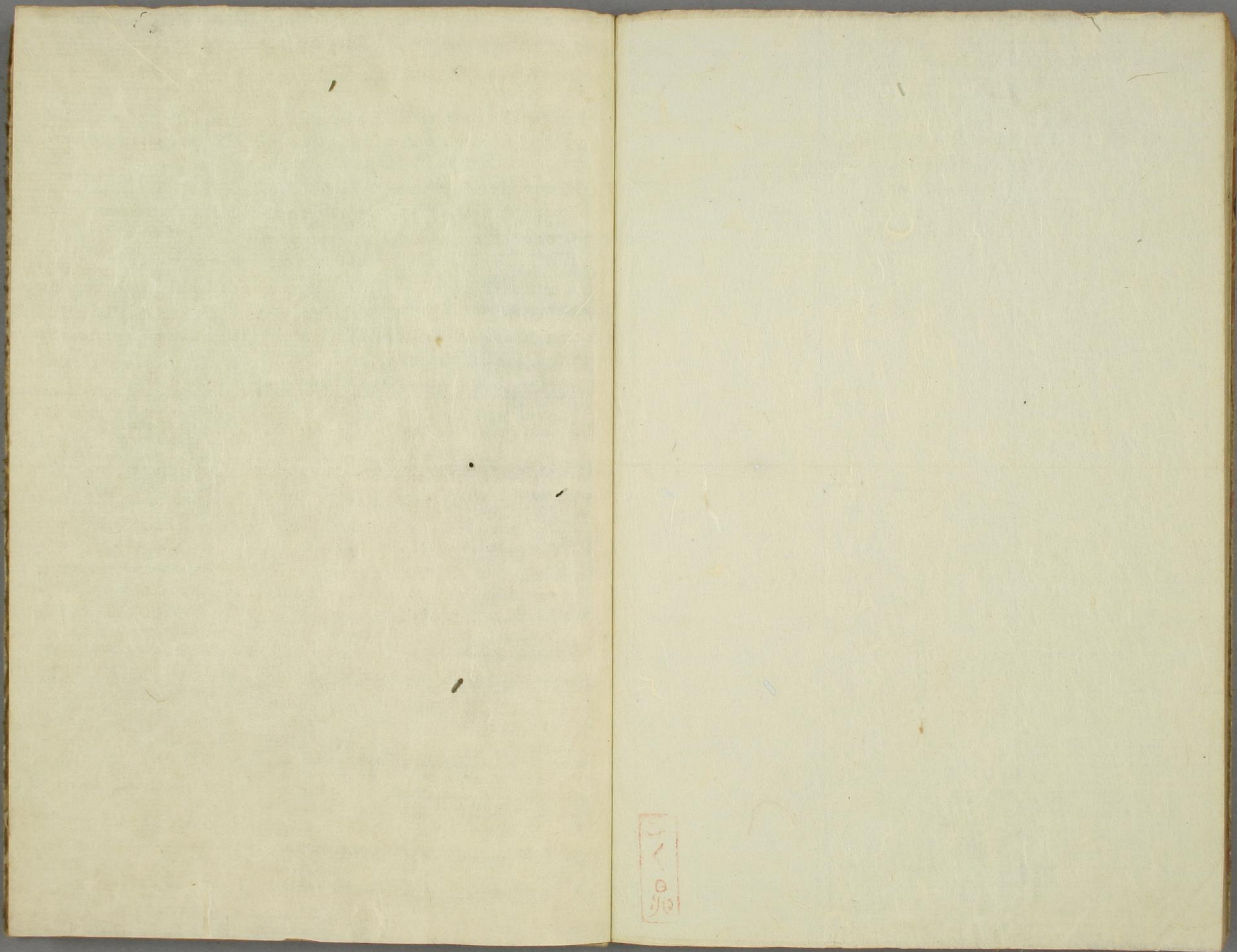
樂器 同前  
 樂人 右七人

<sup>サ</sup>三線 <sup>シ</sup>三線 <sup>シ</sup>三線 <sup>シ</sup>三線  
<sup>シ</sup>三線 <sup>シ</sup>三線 <sup>シ</sup>三線 <sup>シ</sup>三線  
 内田里之子 三線 津西朝里之子  
 根路鉦里之子 同 野國里之子  
 小録里之子 琵琶 根路鉦里之子  
 内田里之子 三線 津西朝里之子

古の歌  
 三線歌  
 三線歌  
 三線歌







三ノ

Handwritten text in cursive Japanese calligraphy (sōsho) on aged paper. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The characters are fluid and expressive, typical of the cursive style. Some characters are clearly legible, such as '後' (after) and '心' (heart/mind). The paper shows signs of wear, including a red circular stamp in the upper right corner of the page and some faint markings.



